

南無妙法蓮華經

2017年から2018年初頭にかけてイベリア半島は類を見ない早魃に襲われました。ポルトガル中部に位置するペドロガオ・グランデの周りで6月17日に発生した森林火事は周囲の道路を飲み込み、逃げようとする人たちを車ごと焼け焦がし64人の市民の命を奪いました。隣国のスペイン、フランスからの消防隊の応援にも関わらず山は1週間燃え続けました。通年、乾期は9月いっぱいですが、昨年の早魃はついに年を越え、10月にもポルトガルで48人、北スペインのガリシア地方で4人の死者を出す森林火事が起こり、私が住んでいたコインブラのすぐ南に位置するロウザア山脈も半月燃え続けました。私も何かできることはないかと、学生運動の仲間たちと協力し合いレプブリカの家々をシェルターとして開放しました。コインブラの街も周りから流れて来る煙で空が何日も覆われるということが数回にわたり続きました。知り合いの家が全焼したなどや、誰々の知り合いが亡くなったなどの非現実的な情報が立て続けに入り、次はいつどこでどのくらい燃えるのかという異様な心配が空気を埋めていたのを覚えています。私はその様な状況下で10月下旬にコインブラ大学での修士課程の口頭試問を終え、ポルトガルを後にしました。

コミソ道場の森下上人様に修士号獲得と、フィレンツェでの研究開始を連絡しますと、すぐに激励と共に、ロンドン道場の永瀬上人様がポルトガル平和行脚を翌年計画されておるというお察しを頂きました。私はすぐにロンドンへと飛び、ポルトガル森林火事犠牲者供養の行脚を発願された永瀬上人様のお話を伺いました。私が行脚への参加をすぐに即答したのは、何かご縁を感じたからであります。

2017年の2月、私はカンボジア、そしてネパールにいました。私が属するTM良薬センターが井戸掘り支援をしている、カンボジア北部シェムリアップ地方の乾季に発生する森林火事と早魃の被害は深刻になる一方で、カムブン・プロウク村の前年度犠牲者は例年を上回るものでした。同センターは災害対策用貯水池を作るプロジェクトを企画され、その調査交渉と犠牲者供養を兼ねて、私はカンボジアへ訪問しました。ネパールはといいますと、せっかくアジアのそっち側にいるのだからついでに2015年ネパール地震の復興支援活動の経過確認と、これからの展望を地元協力団体と打ち合わせして来てくれという依頼の故でした。

カムブン・プロウク村では村人たちから早魃と森林火事の話聞き、共にお祈りさせていただきました。村長、土木業者と貯水池の場所、規格を制定し、池穴を掘り始め、数日後残りの作業と監督を業者と村人にお願ひし、ネパールへと向かいました。カトマンズ空港へと着くと、すぐにパタン市郊外の幼稚園・小中学校復興支援を手伝

ってくれている、スメド・シャキヤさんを訪ねに行きました。親子二代に渡っての日本山妙法寺の信者であるスメドさんに、私が14年前に初めてネパールをお参りに来た時にルンビニ道場でお世話して頂いた、佐藤上人様の消息を尋ねました。スメドさんは「佐藤上人様に会いに行かれるのなら、ここにいなさい。現在カトマンズ市郊外の山に仏舎利塔を建てて地盤固めしておられる。」と言われました。私は、この巡り合わせに驚き、そして感謝し、大きな荷物を携え撃鼓唱題して現れた佐藤上人様を迎えました。

私の事を覚えてくださった佐藤上人様は、私のカトマンズ仏舎利塔建設地をお参りしたいという要望を聞き入れてくれまして、私はそれから一週間、佐藤上人様に付いて仏舎利塔建設地の測量、ポカラ道場へ参詣し仏舎利塔基盤補強のための砂利運びなどご一緒させていただきました。私とその年の秋にポルトガルから、イタリアへ語学研鑽と研究のために移る旨を伝えると、佐藤上人様はシチリアのコミソ道場を紹介してくれました。私はヨーロッパに帰りますと、すぐに森下上人様に連絡を取らせていただき、4月に一度、そして6月の最終日曜に催された19周年記念法要の際にもお参りさせていただきました。

「ジャイメ・デ・マガリャンイス・リマというポルトガル人の思想家を知っていますか？この人の作品は英語にも訳されていません。従って彼の名を聞いてもどの国の哲学者もナンジャラホイと思わるでしょう。しかし相当の人物であったことは確かです。ぜひ読んでみてください。」と、力強くこの思想家の非凡性を、そして凄く懐かしそうに、この無名の思想家を知るきっかけになった20年前に行われた奴隷解放記念イベリア半島行脚の話語っていた永瀬上人様とも、そこでお見知りおきを受けました。ポルトガルに帰った後、調べてみたら、リマもコインブラ大学卒ということを知り、少なからず縁を感じながら日々を過ごしていたところ、森下上人様からの先のメールを頂いたのであります。

こうして、カンボジア北部での早魃の犠牲者供養と災害対策支援のために飛んだ大陸アジアから縁が重なり、私はその1年後の3月17日に、大陸の端のイベリア半島の森林火事犠牲者供養の行脚を発願された永瀬上人様が到着されるのを空港でお待ちしておりました。

行脚出発点であるアヴェイロの町のセイントは王である父の反対を押し切って修道院に入られた聖ジョアナ王女であります。聖王女が住まっていた15世紀築の女子修道院（現在アヴェイロ博物館）に宝蔵されています聖王女の棺、そして聖王女を祭る大聖堂を行脚開始前日にお参りし、行脚のご加護を祈りました。

その日は巡り合わせて聖ジョアナ王女神学校に泊まらせていただきました。学長であるジョアン神父は生徒思いの優しい神父でして、行脚の要旨と心意気を生徒たちに語ってくれるよう永瀬上人様に頼まれました。全寮制である神学校に日曜の夜に帰ってきた生徒たちと、宿直であったレオノル神父と共に夕食を済ました後、永瀬上人様は藤井山主様の言葉や法華経からも引用し、丁寧に語られました。学生たちもジョアン神父も日本山妙法寺の御出家様方の実行力と行脚の力強さに驚き感心され、素直に色々な質問を投げかけられました。

そこで学生の世話されている、シスター・マリアはとにかく親切で「行脚の行く先々で泊まる場所と食事はすでに確保しているのか？」と心配してくれました。「食事はまだどうなるか分かりませんが、泊まる場所は一応確保しています。明日はアゲダの赤十字病院です。」と伝えると「アゲダの人たちも親切だから、よく世話をしてくれるでしょう。明日は雨模様だからあまり体を冷やさないように厚着で行きなさい。」と送り出してくれました。

翌朝、雨が降りしきる中、アヴェイロ市立公園に建つリマの彫刻モニュメントの前で唱題し、お自我偈と立正安国論を上げて行脚を開始しました。この日は16時まで雨が降り続ける予報でありましたが、正午には雨が上がり、打って変わって晴天になりました。ポルトガル中部はその週末までの3週間ほとんど毎日雨が降っておりましたが、私たちの行脚日程の5日間は幸運にもこの朝と最終日にしか雨に降られることはありませんでした。アヴェイロから出発して4時間南西に歩きまして、リマが住まっていた、エイショの聖フランシスコ林園内のハイス紙製資源研究所を訪ねました。受付で入園許可を請いに行きますと、レオノラさんが迎えてくれ、永瀬上人様へ「20年前にあなたたちの行脚を迎えた女性に案内させますから。」と言って、ナティヴィダッデさんと呼んでくれました。彼女も永瀬上人様もお互いの顔を覚えていまして、再会を喜ばれ合われました。彼女の案内に従い、多種の木々で溢れた林園をお二人は昔話に花を咲かせて廻られました。アッシジの聖フランシスコを生涯崇拝したリマが、自宅の二階から渡り廊下を通して、弱った母もお祈りに行けるように建てられた小ぢんまりとしたチャペルを最後にお参りし、唱題しました。リマの家の前のベンチで私たちが昼食を取っていると、昼食休みに出てきた研究者の1人の男性にナティヴィダッデさんは私たちの写真を撮ってくれるように頼みました。「20年前に日本のお坊さんたちをはじめとする団体が土曜にここを寄ったじゃない。その時のお坊さんの1人よ。」と誇らしげに語ります。私は彼もその時からここで働いているのか聞きますと、「そうよ、他にも結構いるわ」とナティヴィダッデさんはまた得意そうに答えます。彼女が出してくれたエスプレッソコーヒーを飲み終え、私たちがお礼を告げると、レオノラさんが送りに出てきてくれまして、「今回は月曜に来てくれて良かった

わ。私も話に聞いていた、日本から来た巡礼者にやっと会えたのですもの。」と言います。「やはり20年前の永瀬上人様方の行脚の事をご存じなのですね。」と尋ねますと、「20年どころか30年以上いるわ。また再開しましょう。20年後に待っているわ。」と笑って送り出してくれました。素敵なお庭の中にある、すごく雰囲気の良い研究所でありました。

エイショから更に南西に3時間、アゲダの赤十字病院に着きました。シスター・マリアの助言に従い、担当のリカルド氏に食事の事を尋ねると、承諾していただき、そこで生活保護を受ける方々と共に夕食を頂きました。リカルド氏は22時の紅茶と夜食にも誘ってくれましたが、私たちはすでに寝ていましたので、私は2段ベッドの上からお礼の返事だけ返させていただきました。

永瀬上人様が立てました、行脚予定では次の宿泊町はメーアリャダでしたが、事前にどこの施設からも宿泊が確保できませんでした。周りの町の消防署や赤十字病院などの様々な施設に尋ねてみたところ、1つ前の町アナディーアの聖ホセ・クラニー会衆系幼稚園が、床にマットレスを置いただけの場所なら私たちのために用意できるとの返事をして下さいました。穏やかな農園や林に囲まれたアナディーアの町は小さく、西洋の御伽噺に出てくるような家々が続く道に聖ホセ・クラニー幼稚園は建っております。迎えてくださったシスター・ファティマは私たちの訪問をすごく歓迎してくださり、「ベッドもお貸しできなくて申し訳ございません。ですが、毛布だけは沢山ありますから、体を暖かくしてお休みください。」と大層親切にしてくださいました。なんだか本当に御伽噺の中に入り込んだようでした。

次の日の3日目は35kmを超すであろう、この5日間で最も長い行脚になるということで、私たちは5時半に幼稚園を出発して、歩き始めました。前の2日間に比べると山を登ることも、谷を下ることもない高低差の少ない行脚でしたが、平らな県道を長い間歩き続けました。コインブラの市街に15時に入ったにも関わらず、消防署が位置する町の裏側に着くために急な丘を越えなくてはならず、結局コインブラ市のサバドレス消防署に着きましたのは17時を回っておりました。

次の日はペネラ消防署での宿泊を予定しておりましたので、夕食後、休憩所に待機する隊員にコインブラ、ペネラ間の消防車か救急車の往来はあるかどうかを尋ねてみますと、ペネラから患者を連れてくることは時々あると言われましたので、次の朝、ペネラ消防署に電話して尋ねてみました。その日に救急車が往復するのなら2人のバックパックを帰りに積んで持って帰って来てくれないかと頼んでみますと、承諾してくださいました。

この4日目は県道ではなく、隊員たちが教えてくれた山々を抜けていく田舎道を通りましたが、実に緑の多い高原道でありまして、牛、羊、山羊が牧畜される草原、ワイン用の葡萄苗で敷き占められた農場など牧歌的な景色を横切りながら、晴天の下、身軽になった体をどんどん進めました。地図上では25kmと想定していた道のりでしたが、30km以上は優に歩いたでありますでしょうか。疲れていたましたが、丘の上に聳え立つ中世の城に向かって行脚して行くのは圧巻でした。中世の城下町であったペネラに着いたのは17時でありました。食事の事を頼んでみますと、厨房の方が未だ残っておられたので昼食の余りもので魚介類スープを私たちのために拵えてくれました。その世話と署長との連絡係をしてくれました、署の心理セラピストであるファティマ女医は、昨年有志消防団から正規消防員に仲間入りした、18歳のカテリーナ隊員とジョアナ隊員も夕食の席に招いて、去年の6月の大惨事の様子を聞かせてくれました。意見を交換し合う中、永瀬上人様の行脚に対する強い意思に感動しながらも、疲労が溜まった両足を引きずるように歩く御上人を彼女たちは心配していました。

その夜から、天気が荒れまして、朝には風雨が横殴りに通り過ぎるといった様子でした。ファティマ女医は診察が始まる前に私たちを、森林火事が通り過ぎたモステイロの街まで車で送るからそこからペドロガオ・グランデまで歩いてみてはどうかと提案してくれました。私たちがお願いしますと、彼女はその旨を副署長に話して下さり、副署長直々にペドロガオの消防署に私たちが予定より早く到着する旨を連絡してくださりました。

「今では、ここらの人はこの道を『死の道』と呼んでいるの。死骸を載せて焼け焦げた車が並んでいた道よ。私はあの日、6月17日も当番で、ペネラ消防署で逃げた避難民を受け入れていたの。皆、生き延びれたのが信じられないと言っていたわ。何十年も火消している古参の隊員でさえ、あんなものは見たことがないって言うくらいよ。燃え上がる炎が発生させるエネルギーで石が宙に浮き上がり、縦横無尽にすごいスピードで飛んでいたんですって。皆が口を揃えて“Como se fosse a apocalipse (世界の終末の様子だ)”と言っていたわ。ほら、見てみなさい、あの道路標示。真っ黒げでしょう。ここから10kmずっとこのままよ。」と運転しながら道路脇の識読不能になった黒い道路標示を指して語るファティマ女医の口調は、その時の事を思い出しているのか暗いものでした。

ペドロガオ・グランデの北東に位置するヴィラ・ファカイアを少し超えたモステイロでファティマ女医に降ろしてもらい、雨に打たれながら最後の10km強を歩きました。道路の両脇は真っ黒に燃え焦げた木々が終わることなく続いていました。現れる道路標示は何も指示することなく不気味に立っていました。私は一心にお題目を唱えて永瀬上人様の後ろに続きました。

『死の道』。この道はいつまで、この名で呼ばれるのでしょうか。10月の森林火災の規模は6月のそれよりも大きいものでした。それでも被害が少なかったのは、「ペドロガオ・グランデの悲劇を繰り返してはならない」と火事に居合わせた市民の多くが、正規、有志消防隊員の横に立ち、火に立ち向かったことに帰するとよく耳にします。この行脚で知り合った方々は誰しも、永瀬上人様に感謝の意を表されました。私たちをお世話してくれた方々は皆、親切に私たちを受け入れてくれ、丁寧に送り出してくれました。実際に火に立ち向かうこともなかった人たちも、この大きすぎた大惨事の被害を真摯に受け止め、今でもそれぞれ闘っていて、いずれ乗り越えていく人々ばかりなのだ、この行脚中私は感じました。

ペドロガオ・グランデに着いた私たちは、消防隊員の活躍を称えるモニュメントの前で、犠牲者供養の法要を行い、お祈りを捧げ、全長130kmになる行脚を終了しました。ペドロガオ・グランデの雨空に私たちのお題目が響き渡りました。

私たちは永瀬上人様が帰英される前日の24日にコインブラに戻り、コインブラの町のセント、聖イザベル王妃を祭る聖クララ修道院を訪れました。聖王妃は生前、夫と息子がポルトガル王であった時、2度も戦争が始まるのを押しとどめ、ポルトガル、スペイン両国にて平和の象徴として、カトリック教会にて列福され崇められています。聖王妃の棺を祭る大聖堂と、街を見下ろすように建てられた聖王妃の行脚立像にお祈りを捧げ、永瀬上人様はロンドンに帰られました。

永瀬上人様が書かれた行脚の要旨はこうして、締められております。

“St. Elizabeth carried out these peace missions through the power of prayer alone, not through armaments, nuclear weapons, or any other form of nuclear power. Non-violence is the only way to bring peace to the people and to the land, the world over.”

(聖イザベル王妃は、祈りの力だけをもってこれらの平和の使命を果たしました。武器、核兵器、原子力の力などは用いませんでした。非暴力こそが人々に、そして地球に平和をもたらす唯一の方法であります。)

空港に向かうためにコインブラの消防署を後にするとき、入り口に向かって唱題三唱する私たちを署長が敬礼して送ってくれた光景を今でも時々思い出します。

合掌 池田光毅